

モンゴルの婚姻関係に織り込まれた冗談関係 ——内モンゴル自治区東北ホルチン・モンゴルの事例を通して——

齊 穎賢¹

A Note on Joking Relationships Embedded in Mongolian Kinship System

QI, Ying Xian

要旨：本稿の目的は、モンゴル社会における「冗談関係」の特質を明らかにすることである。その特質を明らかにするに当たっては、A. R. Radcliffe-Brown (ラドクラフ=ブラウン) が指摘するアフリカのバンツー系社会に存在する「冗談関係 (joking relationship)」・「忌避関係 (avoidance relationship)」を援用し、それらがモンゴル社会にも存在することを確認した上で、それが主に婚姻関係に織り込まれ、親族関係を円滑にしていることを、ホルチン・モンゴル社会の事例を通して説明する。

第1章では、モンゴル人の婚姻関係についての先行研究を整理し、既存の研究ではモンゴル社会における「冗談関係」に対する説明が不十分であることを指摘した。第2章では、Radcliffe-Brownの研究に依拠しつつ冗談関係と忌避関係の定義や仕組みおよび機能を確認した。その上で、モンゴルの婚姻関係とそれに織り込まれた冗談関係の特徴や仕組みについて、フルゲン (=hurgen、婿)、ベル (=ber、嫁) と、姻戚同士であるホド (=hod、男性縁者) とホドガイ (=hodgai、女性縁者) の場合にわけて明らかにした。第3章では、モンゴル自治区東北ホルチン地域の三つの事例をあげた上で、モンゴルの婚姻関係に織り込まれた冗談関係とその機能について論じた。その際に、(1) 女性の姻族関係とその機能、(2) 男性の姻族関係とその機能、(3) 姻戚同士であるホドとホドガイの機能のそれぞれについて言及した。

結論では、以下のことを指摘した。モンゴル社会では、婚姻関係に「冗談関係」と「忌避関係」がワン・セットになって織り込まれていて、親族関係を円滑にしている。モンゴル社会における冗談関係の特徴は、次の三つである。第一は、婚入女性と夫の一族の上位世代の男性との間では、忌避関係が設定されているのに対して、夫の年下のキョウダイとの間、および夫の姉妹の配偶者とは年齢に関係なく、冗談関係が成立している。第二に、婚入女性と比べて男性は、姻族において、妻の年下のキョウダイとの間、および妻の出自集団に婚入した女性との間では、年齢に関係なく冗談関係が成立するが、極端な忌避関係は見られない。第三は、婚姻関係にある姻族・姻戚同士の間では、同一世代間だけに冗談関係が成立している。これらの具体的な事例として、モンゴル社会の日常生活における「冗談関係」と「忌避関係」に注目し、モンゴルの姻族・姻戚関係には、自分と同世代の姻族・姻戚同士の間では冗談関係が設定されていることにより、種々の危機を緩和し、万事を円滑に進行する役割を果たして、家族・親族関係の秩序を保っていることを明らかにした。

キーワード：モンゴル、婚姻関係、冗談関係、忌避関係

はじめに

本稿の目的は、モンゴル社会における「冗談関係」の特質を明らかにすることである。モンゴル社会の婚姻関係においては、冗談関係と忌避関係がワン・セットになって、親族関係を円滑にしている。「冗談関係 (joking relationship)」・「忌避関係 (avoidance relationship)」とは、社会人類学の用語で、主に A. R. Radcliffe-Brown (ラドクリフ=ブラウン) が、アフリカのバンツー系社会の親族関係の特徴を表す用語として用いた。Radcliffe-Brownによると、アフリカのバンツー系社会系では、冗談関係と忌避関係がワン・セットになって人々の行動基準となっているとされている¹⁾。「冗談関係」とは、「他

の人をひやかしたり、からかったりし、そのからかわれ方は、それに対して何ら立腹してはならないという二者間の関係であり、それは習慣によって容認され、またある場合には強要されている²⁾」という。そして、この種の冗談は、「ある極端な尊敬——しばしば部分的なあるいは完全な忌避——を要求するような慣習と通常結びついている³⁾」という。

本稿は、Radcliffe-Brown が指摘している、アフリカのバンツー系社会に存在する「冗談関係」と「忌避関係」がモンゴル社会にも存在することを確認した上で、それが主に婚姻関係に織り込まれ、親族関係を円滑にしていることを、ホルチン・モンゴル社会の事例を通して説明する。

1. モンゴル人の婚姻関係についての先行研究

モンゴルの家族・親族関係においても、人類学者たち

受稿日2011年11月12日 受理日2011年12月16日

1 専修大学大学院文学研究科 (Graduate School of the Humanities, Senshu University)

が「冗談関係」と呼んだ親族慣行を見ることができる。例えば、家族に婚入してきた嫁は、夫の一族における義理の弟妹たち（夫から見たら年下の者に限られてはいる）と、非常に親しく冗談を言い合える関係が制度化されている。加えて、夫の姉妹の配偶者たちとは、夫から見た年齢とかかわりなく、猥褻な言葉を言い合ったり、ばか騒ぎしたりすることができるような関係も制度化されている。一方で、嫁は、義理の父親や義理の兄たちには、極端な尊敬を払う忌避関係が要求されていて、夫から見た年上の男性の前では、軽々しい言動や同席などが一切禁止されている。このように、冗談関係のシステムと忌避関係のシステムは、ワン・セットになっている。

では、なぜモンゴルの家族・親族関係の中に、こうした慣行が織り込まれているのだろうか。また、「冗談関係」・「忌避関係」のシステムは、モンゴルの家族・親族関係において、どのような意味を持ち、どのような機能を果たしているのだろうか。

これまでのモンゴル社会における家族・親族関係に関する研究の中で、姻族・姻戚関係における冗談関係について論じているものはないと言ってよい。これまでのモンゴルの家族・親族関係に関する研究は、主に父系親族の研究だけに偏っており、父系親族関係以外の母方親族、姻族・姻戚関係、擬制的な親族関係については、ほとんど注目されてこなかった。そのため、モンゴル社会の家族・親族関係が全般的に解明されたとは言いがたく、冗談関係の解明も見落とされてきた。

モンゴル社会には、「*og aan tolji uge hele, orog aan tolji nad hi* (=オグ グーン トォールズ ウグ ヘレ、オログ グーン トォールズ ナダ ヒ)」という諺がある。その意味を直訳すると、「自分の出自の世代関係を数えて、気をつけて話しをするのだ、冗談を言うのにも、ちゃんと婚姻関係の世代を数えてからするのだ」になる。このことわざの意味するものは、父系の血縁親族の間では、年長者・上位世代の前では慎重な態度をとることが期待されるが、姻族・姻戚関係においては、同一世代の間に、冗談関係が織り込まれていることを意味しているのである。

これまでのモンゴル社会の婚姻関係に関する先行研究において、モンゴル人の婚姻関係は、「族外婚」であることが明らかにされてきた。モンゴル社会の婚姻関係については、宇野伸浩（1999；2008）、Herbert Harkld Valirando（1957和訳1979）、小長谷有紀（1996）、田中華子（2001；2004）による研究が挙げられる。

宇野の研究は、チンギス・ハーン家とフレグ・ハーン

家といったモンゴル帝国の主権者の特殊な族系における通婚関係を明らかにしている⁴⁾。だが、宇野の研究は、特殊な族系における通婚関係の研究であり、一般のモンゴル社会の婚姻関係ではない。また、どれも文献研究であり、モンゴル人の婚姻関係の実態に立ち入っていないため、モンゴル人の婚姻関係の特徴や機能については全く触れていない。

Valirandoには、1920年代にアメリカに亡命した、異なる地域出身の数名のモンゴル人を対象にした聞き取り調査を行い、モンゴル社会の親族構造を記述した研究がある⁵⁾。その中で、ハルハ・モンゴル人の婚姻儀礼における兄嫁のベルゲン (=bergen⁶⁾)の役割について、その一つは、「標準化したこの場合 (=婚宴、筆者) bergen (嫂) ——この場合ベルゲンとは新夫婦双方の諸兄の妻等を意味する——が伝統的な冗談を云うことである」としている。また、「その必須条件として、彼女等はこの技巧を習得しており、かつ少なくとも中の一人は両家族の間からでなければならない⁷⁾」とも述べている。この「伝統的な冗談を云う」と、「技巧を習得しており」といったことから、1920年代のハルハ・モンゴル地域あるいはモンゴル社会には、慣習として冗談関係が存在していたことを意味していると考えてもいまいだろう。だが、Valirandoはモンゴルの婚姻儀礼において、兄嫁であるベルゲンの果たしている役割が持つ意味までは考察していない。

小長谷は、モンゴル社会の広範囲なフィールド・ワークを行い、モンゴル社会における婚姻儀礼を詳細に紹介している⁸⁾。しかしながら、モンゴル社会の婚姻関係の特徴や、姻族・姻戚関係の持つ意味や果たす機能までは明らかにしていない。小長谷は、モンゴルの婚姻儀礼の過程において多く表れている冗談を、「遊戯的」と表現するにとどまり、それは文化人類学でいう「冗談関係」であることに気づいていない。

田中らの、中国・新疆ウイグル自治区に住むトルゴート・モンゴルの婚姻儀礼における女性親族ベルゲンの役割についての研究報告⁹⁾についても、同様の指摘ができる。田中らの研究は、ベルゲンという婚入女性の婚姻儀礼における役割を取り上げているが、なぜ婚入女性=ベルゲンが、婚姻儀礼において、そのような役割を果たせるのかについては、全く説明していない。田中は、また別の研究において、上述の「*og aan tolji uge hele, orog aan tolji nad hi*」というモンゴルの諺を取り上げて、それを「血筋を数えてものをいえ、姻族関係を数えて冗談をいえ¹⁰⁾」と非常に正確に訳読しているのにもかかわ

らず、婚姻関係の特徴が冗談関係にあることを指摘していない。田中は、この諺を非常に正確に訳読したが、それを「系譜関係を正しく認識して、相手とそれにふさわしいつきあいをせよ」と解釈するに止まっている。しかし、すでに述べたように、このことわざは、父系親族への慎重な態度と、姻族・姻戚の間の冗談関係を意味しているものであり、自分がどの世代であるかはとても重要である。田中は、前者の父系の系譜関係だけに注目し、後者の婚姻関係に織り込まれた冗談関係を看過している。

以上のように、これまでの先行研究は、いずれもモンゴル人の婚姻関係について、通婚関係と婚姻儀礼だけを論じている。「冗談関係」の存在に気づいているものもあるが、それを記述するにとどまり、なぜ冗談関係が存在するのかという意味やその機能について論じてはいない。

2. モンゴルの婚姻関係における冗談関係と忌避関係

2.1 冗談関係とは何か

2.1.1 定義

社会人類学では、冗談関係とは、ある親族や姻族などの人間関係において、相手を冷やかしたり、中傷したり、悪態をついたりしても、そうされた相手は立腹しないどころか、好意や愛情の表現としてそれを受け取るという二者間の関係を指す。これに対して、相手との接触や同席を禁じられ、尊敬語で話しかけたり表敬行動をとることが義務つけられたりするなど、親密さよりも社会的距離を保つ両者の関係を忌避関係という¹¹⁾。また、『新社会学辞典』では、「冗談関係とはある特定の関係にある者同士だけが、個人的には仲が良いだろうが悪かろうがそうしたものは無関係に、悪ふざけなどをすることが許されたり、あるいは時にはそうした行為が期待されるような関係を指すのである」としている¹²⁾。

この種の、いわば基準化された社会関係は、主にアフリカの事例を中心に報告されてきたが、アジア・オセアニア・北アメリカにおいても非常に広範に分布しているとされている¹³⁾。しかし、本格的な研究としては、Radcliffe-Brownが、「分離」と「結合」の観点から、南アフリカのバンツール社会の冗談関係と忌避関係を分析しているに過ぎない。アジア社会における冗談関係と忌避関係に関する研究は、まだ報告されていない。

2.1.2 冗談関係の仕組み

Radcliffe-Brownは、アフリカのバンツール系社会で冗

談関係と忌避関係がワン・セットとなって人々の行動基準になっていると指摘した上で、「冗談関係」という用語によって意味されるものは、ほかの人を冷やかしたり、からかったりし、そのからかわれた方はそれに対して何ら立腹してはならないという二者間の関係であり、それは習慣によって容認され、またある場合には強要されているという¹⁴⁾。そして、この種の冗談は、「ある極端な尊敬——しばしば部分的なあるいは完全な忌避——を要求するような慣習と通常結びついている」と指摘する。

Radcliffe-Brownは、また、冗談関係には二種の類型があるとしている。一つは、その冗談を言える関係が対称的であるもの(A⇔B)。つまり、この類型ではお互いに冗談が言える。もう一つは、その冗談を言える関係が非対称的であるもの(A⇒B)で、A側がB側をからかうことができても、B側がA側に言い返すことができない。また、さまざまな社会にはこの関係の多様な発現形態が存在するとも指摘している。例えば：①言葉上だけ、②ばか騒ぎも、③猥褻なものがある。その類型や仕組みをまとめると、総じて以下ようになる。

個人レベル：

- A、同世代間の冗談関係
- B、二世世代間の冗談関係
- C、隔世代間の冗談関係(孫と祖父母間)

集団レベル：

- A、親族間の冗談関係
- B、姻族間の冗談関係
- C、属外の集団間の冗談関係

2.1.3 冗談関係の機能

Radcliffe-Brownは、冗談と忌避が連合しているこの慣習からみいだされる構造的状況の本質について、「社会的分裂(ママ、分離)は利害関係の分化と、それ故に衝突と敵意の可能性を含むものであるが、一方接合では闘争を避ける必要がある。その二つを組み合わせている一つの関係では、どんな風にして安定した秩序ある形態をとることができるであろうか。こうするには二つの方法がある。一つはそういう関係にある二人の人間の間で極端な相互的な尊敬を保ち、直接の個人的接触を制限することである¹⁵⁾」と指摘している。そして、「クランあるいは部族間における連盟を構成している冗談関係も、また結婚による姻族間におけるそれも、ともに、接合的および分裂(ママ、分離)的構成要素——私はそう名付けたのであるが——が保持され、結び合わされている社

会行動を、一定の安定した体系に組織する方式であるということである¹⁶⁾』としている。また、「親族体系の研究においては、その人たちに対して払われる敬意の種類と程度に応じて、さまざまな親族を区別することが可能である¹⁷⁾』とも指摘している。

加えて、Radcliffe-Brown は、「冗談関係は友情と対立の独特な組み合わせである。このような行動が、もし他の社会関係の中で起これば、敵意を表明したり、引き起こしたりするようなものであるだろうに、これは深刻な意味をもたないし、また深刻に受け取ってはならない。そこには、見せかけの敵意と真の友情がある。別の方法でおきかえてみると、この関係は許容されている無礼の一つである。それ故にこれについての完全な理論はどれでも、社会関係および社会生活一般における尊敬の位置づけの理論の一部であるか、あるいはそれと一致してなければならぬ¹⁸⁾』と述べている。そして、この種の基準化された社会関係は、アフリカばかりではなくアジア、オセアニアおよび北アメリカにおいても非常に広範に分布しているという。だが、人類学の文献にはある程度の材料がすでに存在するが、決して望みうるようなことすべてについてではなく、こうした関係がそのままに正確に観察され、記述されているのは、まだごく稀であるとも指摘した。その上で、Radcliffe-Brown は、この現象を科学的に理解するためには、広く比較研究をすることが必要であるとも指摘している¹⁹⁾。

また、Radcliffe-Brown が、冗談関係と忌避関係は、「非常に広範で、また重要な社会学的問題であるとされる。何故ならば、社会秩序が完全に維持されるということは、ある人々、事物、思想、あるいは象徴物に対して示される尊敬の適切な種類と程度に依存していることが明瞭だからである²⁰⁾』と指摘しているのにもかかわらず、それ以降の研究は、ほとんど進んでいない。

2.2 モンゴルの婚姻関係とそれに織り込まれた冗談関係

周知の如く、モンゴルは元々遊牧的部族社会であった。そして、家族・親族は、父系的原理に基づく家父長制で、外婚制である。では、モンゴルの婚姻関係とは、どのようなものであろうか。他の民族の姻族関係と異なる主な特徴は何であろうか。

部族社会一般に、一部の姻戚間には、冗談関係が埋め込まれているとされる。モンゴル遊牧社会の姻戚関係における冗談関係は、どのような仕組みを持ち、親族関係において何の役割（機能）を果たしているのだろうか。加えて、それが当該社会においてどんな意味を持ってい

るのだろうか。以下では、それらについて述べていきたい。

2.2.1 モンゴルの婚姻関係 図-1

モンゴルの親族関係においては、父系関係のほかに、姻族・姻戚関係も大切な社会的結合である。そして、図-1で示すように、母方の親族の集団と姻族・姻戚という二つの集団が、同一集団である場合、同じ集団であっても、女性が婚入した集団 A の中の誰にとっての関係であるかによって、女性を送り出した集団 B との関係性は異なる。また、両集団相互の関係性もある。つまり、婚出した女性の子ども（＝ジェー、jee）である ego と、母方親族（＝ナガチ、nagachi）との関係は、ジェーとナガチの関係であるが、そのナガチと言う集団は ego の父にとってはハダム（＝hadam）という姻族になり、ego の属する父系親族であるアイマク（＝aimag）にとっては、ホド・ホドガイ（＝hod・hodgai、男性縁者・女性縁者）と言う姻戚関係になるのである。したがって、同じナガチの集団であっても、関係性の違いによって、果たす機能も違ってくるのである。

姻族・姻戚関係は、どの民族でもそうであるように、男女の結婚を通じて結ばれた親族関係であるが、民族や社会・文化的環境によって、その関係の維持の仕方や果たす役割が異なると考えられる。

親族理論の先行研究では、Levi-Strauss (レヴィ・ストロース 1949) は、親族関係における「姻族」について、進化論的な視点から、バンド外婚（つまり婚出）の規則が最も重要な初期の発明であったにちがひなく、それを一種の集団的インセスト・タブーとみなすのが最もよいと主張している²¹⁾。そして、狩猟・採集民の社会組織については、生態学的な視点から、狩猟・採集の技術ゆえに課された小規模な集団、稀薄な人口、移動性、テリトリーとのゆるやかな関係といった制約があるので、親族関係は限られた社会的目的にのみ有効であったとする。父と母とを通じてたどられる親族関係は、バンド内の結束および外部の諸個人や集団との平和的な関係を生むことによって、同じバンドにいる人々を結びつけたとし、様々な生態学的場に適応していたという²²⁾。

この多様化と適応の過程において——これを Sahlins (サーリンズ 1960) は、生物学的進化における「適応放散」になぞらえたが——親族組織を辿るという人類の古き「発明」が、社会組織に関する新たな問題群を解決するに当たって、重要性を帯びてきたと Sahlins は指摘する²³⁾。

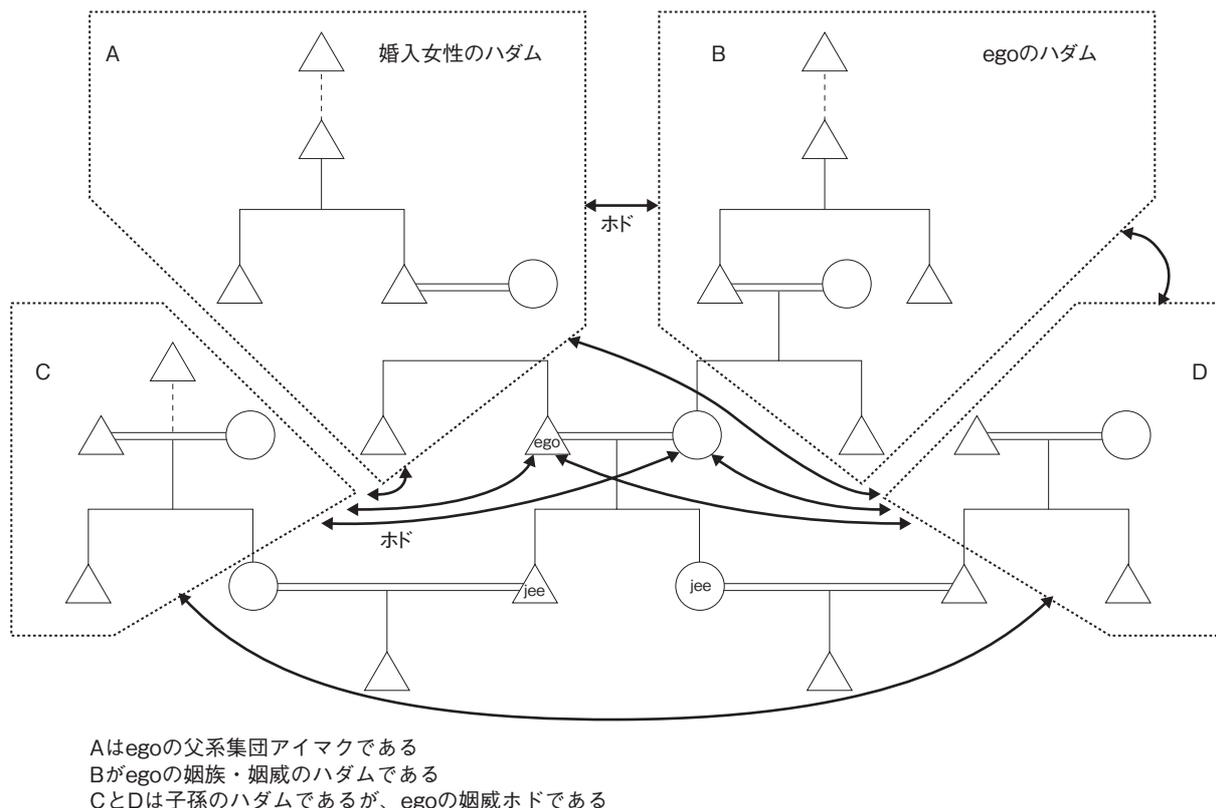


図1 モンゴルの姻族・姻戚関係

親族を生態学的なシステムに取り入れて、体系的にとらえ、日本の親族理論研究にも大きな影響を与えたR. M. Keesing (1982) は、「部族社会にみられる出自集団の大部分は外婚的である」と指摘し、「婚姻」を労働力や生殖能力などに関する「権利の譲渡」として解釈している。権利の譲渡であるから、婚姻は一種の契約でもあるとし、その権利の譲渡に関しては、譲渡した側に対して譲渡された側が、物的・象徴的な補償で埋め合っているという。つまり、婚資である²⁴⁾。姻戚関係が、団体間の他の成員にどこまで拡大するのかについて、Keesing は、二つの部族の間に姻戚関係があるとする仮想事例を分析し、「二つの団体間で婚姻が結ばれたにしても、普通はその一方の団体の全成員が、他方の団体の全成員の姻族になるとは限らないので……姻戚関係は次の世代になると変化する」とし、さらに、「姻戚というのは一時的な関係であって、次の世代になると血族（キンシップ）の関係になってしまうのである」と結論を下した。

総じて言えば、一般的に多くの民族の婚姻関係には、社会の政治的、経済的連合性が見られる。しかし、婚姻関係の在り方については、個人的レベル²⁵⁾と、集団レベ

ル及び個人と集団の二重レベルがあるように、さまざまな形態があることが明かされている。その形態のひとつに、姻族・姻戚間に冗談関係がある。姻族・姻戚間における冗談関係については、現象としていろいろな民族社会に存在することは指摘されている²⁶⁾ものの、その関係がどのような役割を果たしているのかは、まだ解明されていない。

モンゴルの姻族・姻戚関係については、田中らの、新疆ウイグル自治区に住むトルゴート・モンゴルの婚姻儀礼における女性親族ベルゲン (=Bergen) の役割についての研究報告²⁷⁾がある。この研究は、ベルゲンという婚入女性の婚姻儀礼における役割を取り上げたものだが、最も肝心であると思われる、「なぜ婚入女性のベルゲンは、婚姻儀礼において、そのような役割を果たせるのか」については、全く説明していない。

2.2.2 モンゴルの婚姻関係における冗談関係

アフリカバンツール系社会と同様に、モンゴル社会でも冗談関係と忌避関係がワン・セットとなって人々の行動基準になっている。田中の訳読した「血筋を数えてものをいえ、姻族関係を数えて冗談をいえ」という諺が示す

ように、モンゴルの父系の血縁親族の間には、一般的に年長者・上位世代の前では慎重な態度をとることが期待されるが、姻族・姻戚関係においては、同一世代の間には冗談関係が望まれているのである。

モンゴル社会における姻族・姻戚間の冗談関係が、内モンゴル自治区東北ホルチン地域では、現在も広く行われている。ホルチン・モンゴルでは、具体的にどのような冗談を言い合い、それが何の役に立っていて、どのような社会的意義をもっているのかについては後で述べるが、婚姻関係に冗談関係が織り込まれているのは、決してホルチン・モンゴル社会の独特な慣習ではないと考えられる。というのも、1949年から1952年にかけてアメリカに移住したモンゴル人を対象に行われた実態調査から、1920年代における西北モンゴル遊牧社会には、婚姻儀礼の場合において標準化した特徴が、兄嫁のベルゲンが伝統的な冗談を言うことにあるとしている Valirando 報告に見られるように、当時の外モンゴル地域にも婚姻関係における冗談関係が存在していたこと明らかである²⁸⁾。そして、田中の研究にもあるように、新疆ウイグル自治区地域のモンゴル人たちの間では、今もそれが慣行されていることが明らかである。筆者は、中国・青海省海西（モンゴル・チベット自治）州に住むデード・モンゴル人の間でもこのような慣行が行われていることを確認している。さらに、小長谷の報告によると、内モンゴル自治区のその他の各地域には、モンゴル人の結婚式の過程における演出的遊戯が多く見られる²⁹⁾とある。

しかし、冗談関係は非常に重要な社会学的問題であるにもかかわらず、モンゴル社会における冗談関係の研究はほとんど進んでおらず、全く解明されていない。アジア社会における冗談関係についての研究報告も管見の限り見当たらない³⁰⁾。

そして、モンゴル社会の婚姻関係においては、誰が冗談関係を使うのか、あるいは誰と誰とが冗談関係にあるのか。またどのような冗談を言うのか。そして、それが個人間、集団間の何を解決し、なぜそれがなされるのかを以下で検討し、その重要性を明らかにする。

2.2.3 冗談関係の仕組み 図一 2

モンゴル社会には、姻族・姻戚の人間関係において、同一世代の一部の間に特別な冗談関係が設定され、伝統として現在も続いている。その関係は、婚姻を結んだその時点から始まる。関係を結ぶのは、姻族・姻戚関係の一部分の、しかも同一世代同士の人である。この関係を説明するにあたって、図一 2 のように、A という男性と

B という女性との縁組を想定し、男性 A の家族・親族の A 組と、女性 B の家族・親族の B 組を設定する。その上で、冗談を言える範囲を、(1) フルゲン (=hurgen、婿)、婚姻当事者の男性 A の場合、(2) ベル (=ber、嫁、ベルゲン=bergen、兄嫁の尊敬語)、婚姻当事者の女性 B の場合、(3) ホド (=hod、男性縁者) とホドガイ (=hodogai、女性縁者)、男女 2 人に関わる姻族・姻戚関係者の A 組と B 組の集団間の場合という、三つのカテゴリーに分けて、それぞれを図で示しながら、検討を進めることにする。

ここで、まず記号の示す意味を説明しておこう。男女、結婚、子孫とキョウダイ関係については、従来からの文化人類学での常用記号に従うが、今までになかった関係の記号を次のように設定する。A° は A の親、B° は B の親、A+ は A より年長、B+ は B より年長、A- は A より年下、B- は B より年下、`A は男性側の姻族、`B は女性側の姻族、An は男性側のキョウダイの No、Bn は女性側のキョウダイの No、—太い実線は一番の冗談相手にある関係を指し、—細い実線は冗談可である関係を指すが、家の中では控えめである。≡≡≡螺旋は冗談可の関係であるが、第三者に対して共同して冗談で言い負かすときの「同士³¹⁾」の関係でもある（姻族・姻戚においては、婿か嫁という同じ立場であるため）、……虚線は冗談禁止の関係を示し、同席可である。×××バツ線は冗談禁止の関係を指し、同席も禁止の関係である。冗談関係の範疇と、その関係の程度をフルゲン（婿）、ベル（嫁）、ホドとホドガイ（姻戚同士）の三つの場合に分けて整理すると以下ようになる。

2.2.4 フルゲン (=hurugen、婿) の場合 図一 3

モンゴルでは、婚姻当事者である男性 A は、姻族からはフルゲン（婿）とよばれている。そしてフルゲンは、姻族であるハダムにおいては、妻の親族集団の中の、妻の兄・姉 (=hadam aha / egechi、ハダム アハ・エクチ) に敬意を払い、冗談禁止の関係であるが、特別な忌避はない。しかし、妻より年下のキョウダイ（義理の弟・妹、hur duu=フル・ドー）とその結婚相手、及び妻より年上のキョウダイの結婚相手（兄嫁と姉婿）とは特別な冗談関係が成立している。その中で冗談の程度を四つに分けることができる。それぞれの程度によって、冗談が言えるカテゴリー（範疇）が決まっている。それは、次の 4 種類の相手である。

- ① フルゲンと妻の年下の弟妹（フル・ドー）との冗談関係。フルゲンは妻の年下の弟妹（フル・ドー、義

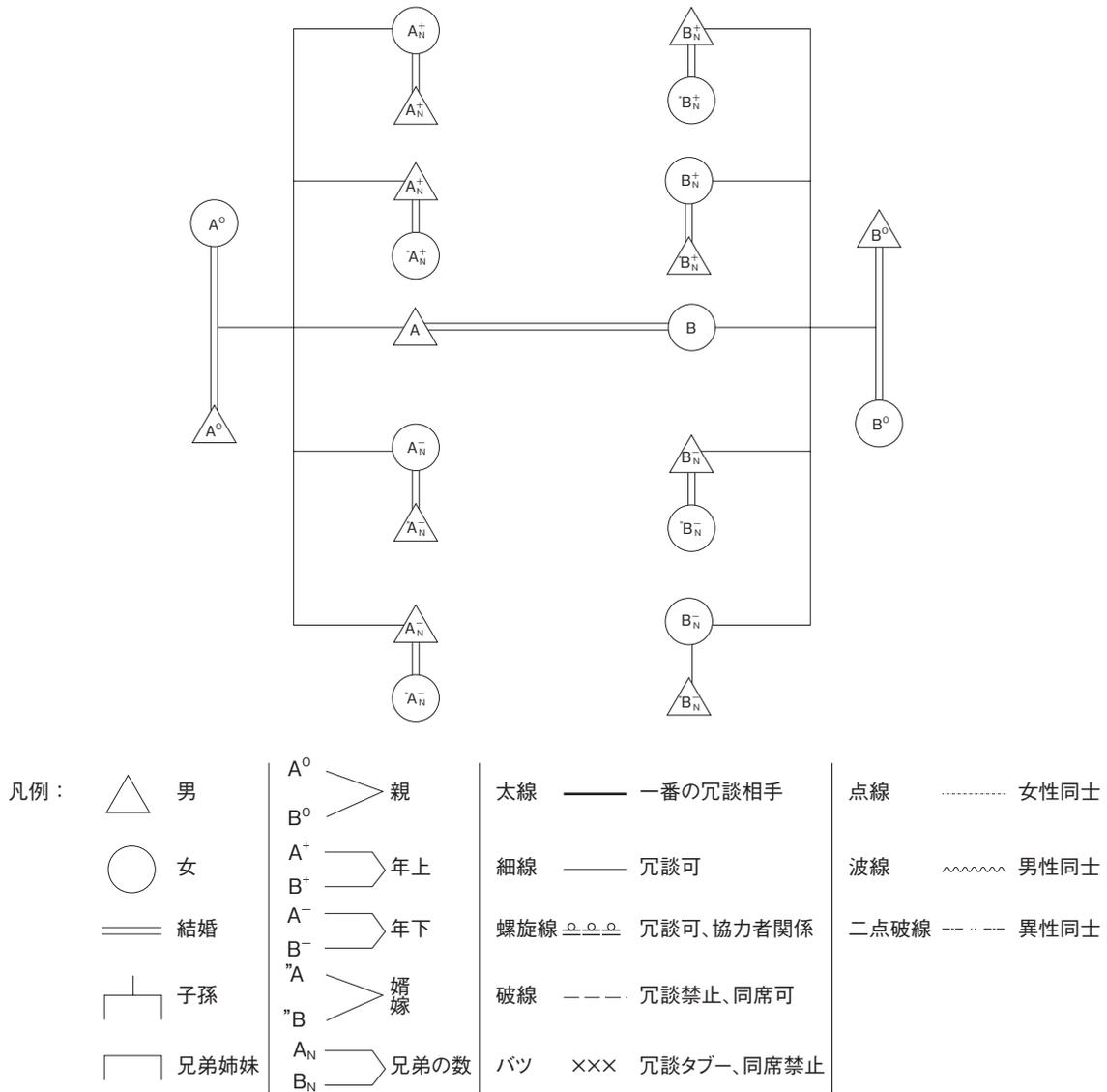


図2 男性Aと女性Bの婚姻関係

理の弟・妹) に対して、冗談関係は成立するが、その程度が控えめである。義理の弟・妹のフル・ドーからは、姉婿はフルゲン・アハ(=hurge aha、婿兄)と呼ばれ、近い兄弟にもなるからである。

② フルゲンと妻の親族集団の中のフル・ドー(妻より年下の義理のイトコ)との冗談関係。フルゲンは妻の年下の義理のイトコとは、普通の冗談相手の関係にある。年下の義理のイトコ(フル・ドー)たちからも、フルゲン・アハと呼ばれる。

③ フルゲンと妻の家族・親族における婚入女性ベル(嫁)との冗談関係。これはフルゲン(婿)対ベリ(嫁)であり、同世代であれば、年齢に関係なく冗談関係が成立し、最も相性の良い冗談相手でもある。

④ フルゲン(婿)対他のフルゲン(婿)の冗談関係。フルゲンは妻の出自集団におけるその他のフルゲ

ンと、同世代であれば、年齢に関係なく冗談関係が成立する。これは言わば、フルゲン対フルゲンという縁者同士の冗談関係になる。そして、同じくフルゲンという立場であるので、冗談ができる対象者も共通している。したがって、フルゲンたちが共同で義理のフル・ドーたちやベルたちを共同して冗談で言い負かすときの同士でもある。

⑤ フルゲンは、姻族・姻戚において、妻より上位世代の人々には敬意を払わなければならないが、極端な忌避がない。

このように、男性(フルゲン)は妻の出自集団において、ハダムの姻族・姻戚との間にソフトに接合できるように、冗談関係が設定されている。それによって、婿であるフルゲンは、姻族・姻戚との間の親族関係が円滑になる。また、この冗談関係を介して、姻族・姻戚におけ

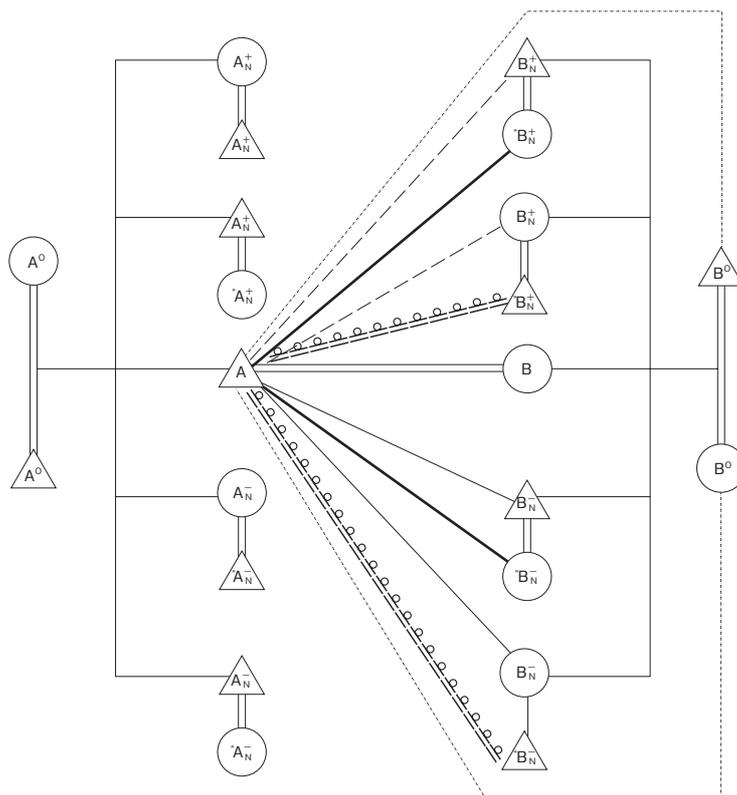


図3 男性（フルゲン）にとっての冗談関係（凡例は図2を参照）

る冠婚葬祭の場で、大いに活躍することができる。

2.2.5 ベル（=ber、嫁）の場合 図-4

婚姻当事者である女性Bは、姻族からベル（嫁）とよばれているが、夫より年下のキョウダイからはベルギー（=berugii）、あるいはベルゲン（=berugen、兄嫁）と敬称される。女性の婚家における冗談関係は、基本的に男性の場合と同じであるが、以下で指摘するように大きく二つの相違点がある。そのひとつは、婚入した女性には、義理の父の世代や夫より年上の男性など夫の上位世代の男性との間に、極端な忌避関係が設定されている（相違点1）。これに対して、婚入女性には、夫より年下の弟・妹と冗談関係が成立する。また、夫の姉妹の結婚相手（姉婿と妹婿）とは、年齢に関係なく特別な冗談関係が成立している。もうひとつの相違点は、上述した婿のフルゲン同士の冗談関係が成立するのに、対して、嫁のベル同士は冗談が成立しないことである（④）（相違点2）。ここで冗談と忌避の度を整理すると、以下のように分けることができる。

① ベルゲン（兄嫁）は、夫の年下の弟妹（フル・ドー、義理の弟妹）との間は、冗談関係が成立している。しかし、その程度は脆弱である。特に、ベルゲンは結婚後、時間が経つにつれて一家の主婦になり、年下の

弟妹に種々の世話をすることから、年下の弟妹から「お姉さん」と親しまれ、冗談ができなくなる。あるいは、ベルゲンはフル・ドーたちには冗談を言えるが、フル・ドーたちは、尊敬の意味で冗談を控えるようになる。

② ベルゲンと夫の親族集団との関係性のうち、そのひとつである夫の年下のイトコ弟妹であるフル・ドー（義理の年下イトコ弟妹）たちとは、普通程度の冗談関係にある。義理のイトコのフル・ドーたちからも、ベルゲンと呼ばれる。

③ ベルゲンは、夫の家族・親族関係における婚出女性の結婚相手であるフルゲンとの冗談関係が、同世代であれば年齢に関係なく成立する。ベルゲンにとってフルゲンは、最も冗談を言える相手でもある。これは、既にあるフルゲンの場合の③でも述べたように、フルゲン（婿）対ベリ（嫁）の関係である。

④ ベル（嫁）とベル（嫁）の関係であり、冗談関係ではない。しかし、冗談を言える対象が共通のときに、共同して冗談で言い負かす同士である。

⑤ ベル（嫁）は、夫の家族・親族において、義理の父親以上の一族の上位世代との間では、極端な忌避関係にあり、同席が禁じられていて、互いに言動を控える。

⑥ ベル（嫁）は、夫の家族・親族において、夫の年上の兄たちとの間も、極端な忌避関係にあり、同席が禁

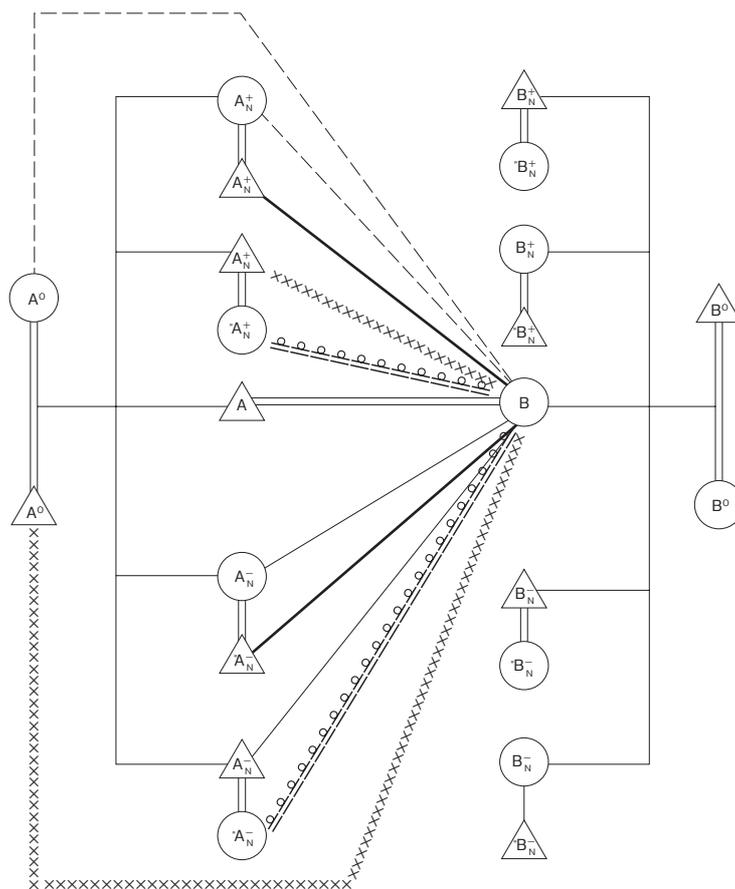


図4 婚入女性（ベル）にとっての冗談関係（凡例は図2を参照）

じられていて、互いに言動を控える。

⑦ ベル（嫁）は、夫の家族・親族において、義理の母親の世代や義理の姉といった目上の女性たちの間には、冗談関係が成立しない。敬意を払い、嫁の習わしなどのしきたりに従い、指導を受けるが、極端な忌避関係ではない。

このように、婚入女性の夫の家族・親族集団における冗談関係の相手は、ほぼ男性のそれと同じである。しかし、図-4で示すように、婚姻当事者の女性Bの場合と、図-3で示すように、同じく婚姻当事者である男性Aの場合とで異なる点は、女性Bが夫より上位世代の男性には極端な敬意を払わなければならないことにある。これにより、女性Bは、夫より上位世代の男性たちの前では、控えめに振舞い、同席が禁止される（⑤と⑥）。つまり、婚入した女性には、義理の父の世代よりも上の男性および夫より年上の兄たちとの間に、特別な忌避関係が設定されている（第1の相違点）。これと対称的に、女性は年下の者たちやその姻族との間には、冗談関係が設定されている。つまり、モンゴル社会では、婚入女性のベルには、冗談関係と忌避関係がワン・セットで設定されていることになる。

では、なぜ婚入女性のベル（嫁）が帯びる、夫の家族・親族である姻族・姻戚との関係性には、既婚男性のフルゲン（婿）が妻の家族・親族である姻族・姻戚との間に持つ関係性と比べて、このような二つの相違点があるのだろうか。

モンゴル社会においては、相違点の前者である、婚入女性に設定された忌避関係の持つ意味は、次の点にあると考えられる。つまり、婚入女性は夫の家族・親族にとって、嫁という正式な一員として、その他の成員と違って外部集団から加入してきた者である。どの社会でもそうであろうが、それぞれの集団にはそれぞれの規範があるように、それぞれの家族や親族にもそれぞれの規範がある。では、異なる集団の中で生まれ育った嫁という婚入女性を、如何にして夫の家族・親族とうまく結合できるのだろうか。各社会によってその方法は異なるだろうが、モンゴル社会においては、外部から加入してきた一員である嫁たちには、加入させた夫の家族・親族側の規範に従順させるために、その家族・親族の要である男性あるいはこれから家族・親族の要になる可能性がある先輩の男性との間に、緊張関係を持たされる。たとえば、同席が禁止されたり、上位世代者の名前を口にすること

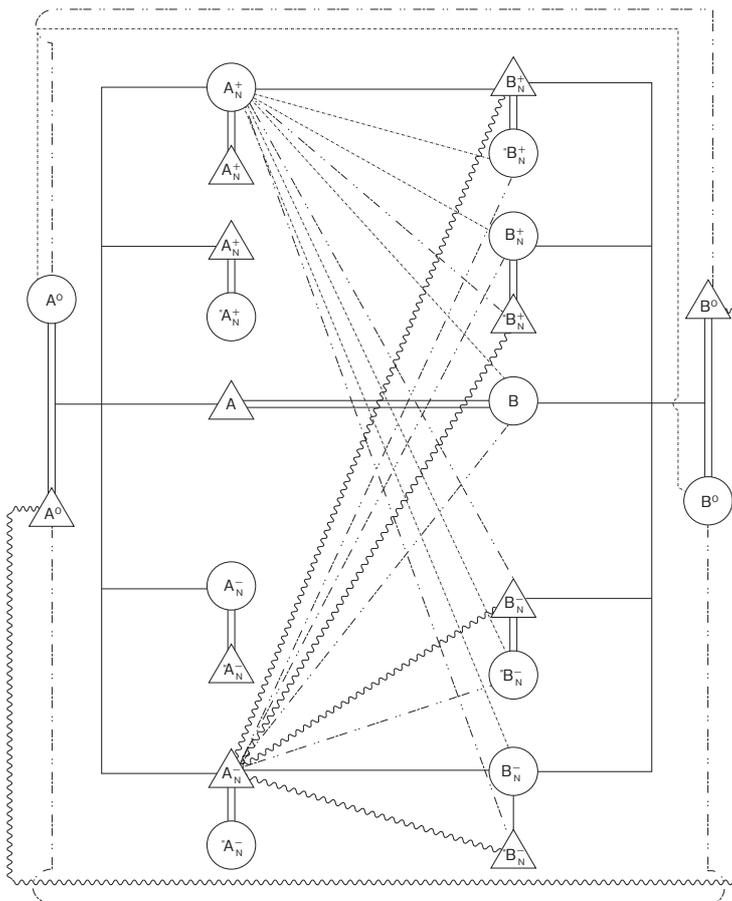


図5 姻族A集団と姻族B集団の間の冗談関係（凡例は図2を参照）

を避けたり、軽々しい言動を控えたりすることである。しかし、モンゴル社会における忌避関係は嫁側の一方的な忌避ではなく、双方向的である。婚入女性の姻族・姻戚関係における上位世代の男性、および夫より年上の男性も、嫁の前では尊厳のある言動が期待されている。また、夫の上位世代の男性、および夫より年上の男性が嫁に対する意見や教育をする際は、威厳を振り撒いて直接嫁に伝えるのではなく、夫の上位世代の女性、あるいは夫より年上の女性を介して行われなければならない。このようなモンゴル社会における忌避関係は、モンゴルの家族・親族の秩序において、家族・親族の要である者の男性と婚入女性の間、一定の分離を生じさせている。しかし、その忌避関係のみが存在するのではなく、夫の一族における年下の者や婚出女性の結婚相手との間には、冗談関係も設定されるなど、家族・親族と接合させる形で、バランスが取れた関係が設定されている。

第2の相違点である、フルゲンである婿同士の冗談が成立しているのに対して、婚入女性のベルである嫁同士の冗談関係が成立しない理由は、同一の婚家集団の中で生活することになるベルたちにとって、先に婚入してきたベルの方が相対的に上位にたち、後から婚入してきた

ベルを指導するという立場にもあるため、ベル間に対等な関係性が形成されないからである。ただし、彼女たちはベルという同じ立場にあり、冗談を言うことができる対象者も共通しているため、第三者を言い負かすときには、共同でそれができる同士でもある。

2.2.6 姻戚同士であるホドとホドガイの場合 図一5

上述したように、婚姻当事者の男女の個人に設定された冗談関係の他に、モンゴル社会においては、縁者同士にも冗談関係が成立している。姻戚同士における冗談関係の仕組みは、婚姻当事者の男女のそれと比べると、それほど複雑ではなく、同一世代であれば性別に関係なく一般に成立する。

- ① ホドとホド—男性同士
- ② ホドガイとホドガイ—女性同士
- ③ ホドとホドガイ—異性同士

上記で確認をしたように、フルゲンのもつ冗談関係とベルのそれとを比較すると、モンゴル社会における婚姻関係に織りこまれた冗談関係の仕組みの特徴の一つは、男女によって異なる点が存在することにある。その相違点について、次の項において、モンゴル社会における冗

談関係と忌避関係の果たしている機能について検討する際に、詳しく述べることにする。もう一つの特徴は、姻族・姻戚間において、冗談関係の設定が同一世代に限られている点である。

3. モンゴルの婚姻関係に埋め込まれた冗談関係とその機能

モンゴル社会において、姻族・姻戚間では、互いにどのような冗談を言い合い、それが何を意味しているのだろうか。内モンゴル自治区東北ホルチン地域において、近現代化の流れの中で、モンゴル人の社会の家族・親族構造も大きく変化し、家族・親族の秩序も大きく変容している。その中で、嫁のベルと夫の上位世代の男性との間における「忌避関係」は、現在はほとんど消失している。しかし、姻族・親戚の間に織り込まれた冗談関係は、今なお婚姻儀礼だけではなく、日常生活においても広く確認できる。以下では、いくつかの事例を通して冗談関係の機能を検討する。紙幅の関係で多くの事例を挙げることはできないが、まず冗談関係の事例を三つあげる。

3.1 冗談関係の事例

——内モンゴル自治区東北ホルチン地域の実例

事例1：

S村という小さな村落の男性とD村という比較的に大きい村落の女性が結婚することになった。結婚儀礼においては、両側を代表するトゥルー・ホド（Turu hodo、首領の縁者）が最も重要な人物である。しかし、その両側を代表するトゥルー・ホドになるには、婚姻当事者男女の最も近い血縁関係にある父親や実の兄等を避けるのがモンゴルの伝統である³²⁾。男性側はS村では有能で人望が厚いAさんをトゥルー・ホドに選出した。もう一つの理由は、Aさんの妻がD村の出身であり、言わばAさんの姻族・姻戚がD村にいたことであった。そのため、S村の人々は、Aさんであれば、D村のことをよく知っていて、古いフルゲン（年取った婿さん＝50才代）でもあるため、さまざまな危機を乗り越えるだろうと考えたようである。結婚式は確かに大成功だったようにみえた。しかし、Aさんは結婚式が大成功したにもかかわらず、「大失敗だった」と口にした。それは、結婚式が失敗したのではなく、自分がトゥルー・ホドに選ばれたことを意味していた。つまり、Aさんは、D村では婿であるフルゲンという立場にあるため、結婚式にもホドという縁者として扱われず、相手側のトゥルー・ホド

に、「おまえは、ホドではなく、我々（村）のフルゲンだよ」と言われて一世代下げられてしまい、下位世代として扱われたからである。ただし、Aさんの言う「失敗」は冗談で負けただけであり、彼のいろいろな冗談を交わす中で結婚式は大成功を取めたのだった。

事例2：日常生活におけるベルゲンと義理の弟の冗談

ある家族の兄弟とベルゲンのことである。その弟は、兄の持つ新しい帽子を欲しがすが、自分からはなかなか言い出せないでいた。それは、モンゴルの家族秩序において、家の主である男性の父や兄の威厳が大きいからである。家の主の父と嫁との間にある忌避関係ほどではないが、上下の関係も非常に厳しい。だが、ベルゲンと義理の弟の間には、冗談関係が効く緩い関係が存在する。そのため帽子の無心を弟は兄には言い出しにくい、兄嫁の方には言いやすいのである。そこで、弟は兄嫁のベルゲンを介して兄の新しい帽子をねだったが、その際ベルゲンは、「お前は、恋人が欲しくてオシャレばかりを考えているね。でも、社会的なモラルもしっかり身につけないと、お前につく恋人も、牛フンに差した花のものにもったいないね」と見下すように話しかけた。

このやりとりには、以下の背景がある。兄は弟の近頃の社会的言動を非常不満に思っていたが、容易に口に出して言えなかった。そこに弟が兄の帽子を無心してきたので、ベルゲンの口から冗談をまじえて兄の言葉を伝えた。これは、一つの家庭教育でもある。続けてベルゲンは言う。

「今はおしゃれをしようとしているけれど、わたしがこの家に来たときは、君はまだ勝が空いたズボンだったわ」

この話の含意は、「わたしは、お前の幼いころから、全部のものを見てきた」ということであり、年頃の青年にとっては、最も恥ずかしいことである。このやりとりでは、ベルゲンは弟の弱みをつかみ、自分を上位におくひとつの冗談の技術がみとれる。最後にベルゲンは以下のように話すことで、話を締めくくった。

「いつか我々のエプセン（=Yebesen、嫁同士の相称）が家に来たら、お前がわたしの懐におしっこをしたことやお前のウンチが犬の頭ほど大きかったことを言うわ」

弟は兄の帽子が欲しいがために、話の聞き手に徹するしかなかった。そうすることで、後日、ベルゲンの仲介により弟は兄の帽子を貰うことができた。

この話は、異なる文化を持つ人々から見ると、くだら

なくて何を言っているのか理解しにくいかもしれない。しかし、これはホルチン・モンゴルにおけるごく普通の家庭の日常生活で繰り返されるベルゲンと義理の弟の間の親しい冗談であり、このような冗談を通じて、ベルゲンは夫の弟妹への家庭教育のサポート役を果たし、親族間の関係をも円滑にするのである。

事例3：今では忌避関係が緩くなり、ほとんど機能していないと言ってよいが、ところどころで、その面影を垣間見することもできる。例えば、誰かが義理の上位世代の男性に、不条理に振る舞った場面にあっても、「ここにはベルや子供がいるので」と言い、義理の上位世代の男性が言動を控えめにすることは、今でも見られる。このように忌避関係は、嫁だけが遵守しなければならないものではない。忌避関係にあった義理の上位世代の男性にもあてはまる。また、冠婚葬祭の宴席で、忌避関係にある嫁が親族の上位世代の男性と同席している時、「〇〇さんが義理の兄と同席してしまっているね、今どきの若い嫁は……」という言葉も聞くことができる。

3.2 モンゴルの婚姻関係における冗談関係の機能

3.2.1 女性の姻族関係とその機能

モンゴル社会における婚入女性には、婚家においてまずは「ベル イン ヨソ」というしきたりがある。それは、各家庭によって格差があるが、およそ結婚から3年目前後まで、義理の母親に従い、夫の家族・親族一族の秩序を習わせるシステムである。その後は、おおよそ夫の家系のしきたりを身に付け、一人前の嫁になったと判断された時には、「ベル ダルハラフ」(嫁の解放)という義式を行い、彼女はその時から夫の家の主婦として、家庭内の主権を持つことになる。そのしきたりの一つは、夫の上位世代の男性には極端な敬意を払わなければならないことにある。また、このしきたりは、「嫁の解放」になっても、ずっと続くことになる。一般に女性は、夫より上位世代の男性の前では、言動を控えめにし、同席も禁止される。だが、この忌避関係が嫁の一方だけに設定されたものではなく、双方向的である。つまり、義理の父や義理の兄たちも、嫁に当たる女性の前では、尊厳のある言動をとらなければならない。

つまり、事例2と事例3で示したように、婚入した女性には、義理の父の世代よりも上の男性および夫より年上の兄たちとの間に、特別な忌避関係が設定されている。これと対称的に、年下の者たちやその姻族との間には、冗談関係が設定されている。つまり、モンゴル社会

では、婚入女性のベルには、冗談関係と忌避関係がワン・セットで設定されていることになる。

これまでのモンゴルの家族研究は、家父長制として、男性の権威ばかりを強調してきたゆえに、女性にはほとんど目を向けてこなかった。女性に関して周縁的な扱いばかりで、男尊女卑的である。上下関係についての厳しさの指摘ばかりがなされ、婚入女性のバランスをもたらず冗談関係には全く気づいてこなかった。

しかし、モンゴル社会において、婚入女性に冗談関係が設定されているので、自分の姻族・姻戚に対して、夫の家族やその父系親族の族員たちが代替のできない役割を持っている。それは、主に、新たな縁結びから結婚するまでの過程において、①親族を代表する役割を果たし、②花嫁を母親から分離し、花婿側へスムーズに移すときのサポート役を果たし、③限定的なコンテキストで、双方の親族の間にある緊張関係とその解消の儀礼的演出に係る役割を果たしていることが指摘されている³³⁾。

嫁のベルがこれらの役割を果たせるのは、冗談関係の仕組みにおいて、フルゲンの場合の③と、ベルの場合③でも指摘したように、フルゲンと義理の母や義理の姉らの間には冗談関係が成立せず、ベルゲンとは冗談関係が成立しているからである。

この現象については、モンゴルの古典的な文献からは伺うことができないが、従来から存在していた慣行であると思われる。これは、筆者自身の生まれ育ったホルチン地域のモンゴル人たちだけの特別な慣習のみをもって言及しているわけではない。というのは、既に2.2.2項で述べたように、新疆ウイグル自治区地域、青海省海西州地域、ハルハ・モンゴル地域にもこの慣習が存在していたし、小長谷の報告では、内モンゴル自治区の各地域には、格差があるものの、モンゴル人の結婚式の過程における演出的遊戯が多く見られる³⁴⁾とあるように、この慣行はモンゴルの各地域に、広く伝わっていると考えられる。

3.2.2 男性の姻族関係とその機能

モンゴル社会では、男性は結婚して妻の家族・親族に姻族として、とても親しい関係を持つことになる。モンゴルでは、「*hune gas hurgen hundu tai* (フネーヘース・フルゲン・フンドテイ)」(=他人の中では最も大切な人は婿である)ということわざがあるように、結婚した男性は婿として妻の家族・親族の中では、客の中でも一番の貴人として扱われることになっている。

男性にとってのハダムは、妻や子供に種々の世話や気遣いをしてくれることで、精神的な支えの役割を果たしている。それと同時に、種々の儀礼や普段の交流を通じて、物資的な援助などもある。それらが、父系親族からの分家時に、男性の財産となる。また、父系の親族、とりわけ父が貧しい場合、あるいは経済的に意図せぬ窮地に陥った場合、男性が妻方居住も可能であり、ハダムは生活においては大きな頼りにもなり、欠かすことのできないサポート役を果たす機能を持っている。もし、男性が結婚時にすでに親を亡くしている場合は、ハダムが男性にとっても、精神的な面において大きな支えとなる役割を演じる存在になる。また、高明潔の研究が明らかにしているように、モンゴル遊牧社会には妻方居住婚も多く存在し、相続も行われているという³⁵⁾。

次に、姻族にとっての婿とその役割について見てみよう。モンゴル社会は、父系原理に基づいた社会であるため、姻族関係においては、男性は婿という外部者としての性質を持っている。しかし、家族・一族の一員ではないが、姻族として、同じく冗談関係に組み込まれているため、自分の姻族の新たな縁談・縁組にとっては、男性＝婿はとても重要な存在である。例えば、モンゴルの縁談の場合、婚資の交渉や結納や結婚など婚姻儀礼の時に、父親と兄たち両家の直系の親類が直接交渉するのを避ける。その時には、兄の代わりに婿さんが活躍して、冗談関係を交えながら粘り強く交渉に当たることができる。そうすることで、該当の縁談の両家の者たちは、相手に言われたことを、何があっても間接的に受け取ることになり、親族関係が円滑化されてスムーズに運ばれることになるのである。

一般の親族関係にみられるような、目上への尊敬はもちろんのことだが、ハダムの中でのモンゴルの男性には極端な忌避関係は見られない。それは、モンゴル社会においては、フルゲンはあくまでも外部者であり、内部者ではないため、妻の家族・親族に対しては、極端な敬意や忌避感を持って分離する必要がないからであろう。

3.2.3 姻戚同士であるホドとホドガイの機能

これまでの先行研究でも明らかにされてきたように、モンゴルは族外婚制の社会であるが、モンゴルは元々人口が疎らで、部族も数えられるほどであったため、通婚できる部族が限られている。そのため、egoの母方親族のナガチンは、egoの父系親族における男性（従兄弟）の結婚相手を提供できる重要な対象にもなる。そして、絶えざる姻親関係の更新による集団的連合は、社会的政

治や経済の拡大にもつながるのである。

集団的連合の面から言うと、もともと、モンゴルの婚姻関係の締結は、男と女の関係というより、集団と集団の締結要素が強かった。もちろんこれは以前の事情になるが、男女の結婚は、集団と集団、つまり男家と女家が相互に一定の交流時間を経て、互いに認可した結果、到達するものであった。男女の結婚後にしても、両家の冠婚葬祭に出席する際、代表者となるのは、婿でもなく嫁でもなく、両家の親が先である。そして、すでに述べた事例1が示すように、相互に姻族となるホドとして最も重要なのは、その他の男女に関する「縁談」から「結婚」までの過程におけるジョーチ[juuch (仲人)]の役割である。

事例が示すように、モンゴルでは、縁談から結婚式までの全過程において、男女両家の親同士が直接交渉することを避け、ジョーチという仲人を派遣して両家の中に立てることになっている。

例えば、モンゴルの婚姻に関する、文献資料の例をあげると、『元朝秘史³⁶⁾』の巻一には、以下の記述がある。「(チンギス・ハーンの高祖に当たる) アンバガイ＝ハンはブル湖とケレン湖の間にあるウルシウン河のほとりに住んでいたイリウト、ビルウトという姓のタタルの二部族に娘を与えることになり、彼女を送っていたが、その時タタル族のジュイン氏の者に捕まえられた。かれらはアンバガイを金朝の皇帝アルタン＝ハンに引き渡した」。それを知った他の部族の者は、「一国の王たるものがみずから娘を送っていくことなどは、断じてしてはならない³⁷⁾」と記載しているように、結婚式に両親が自ら娘を婚家に送ることは禁じられている。例外はあるが、このようなジョーチや、結婚式に娘を送りに行く代表者であるトゥルー・ホダーの選出にあたっては、ホドのうち名誉があるもので、かつ有能なものが当てられる。

ジョーチやトゥルー・ホドのような役目の者がホドから選ばれるのは、モンゴル社会には、姻族間の中で冗談関係という特殊なシステムが設置されているからである。それ故に、冠婚葬祭などの節目には、主催側の当事者よりも、冗談を言える関係を持ちながら、名誉があり、有能なホドの方が、種々の危機的な場面を冗談をも交えながら緩和し万事を円滑に進行するために、親族の代理として一切を進行する役割をも果たすことになる。この慣習は、『元朝秘史』のようなモンゴルの古典である文献上からも確認できるように、既に元代には存在していたが、これまでの研究では、全く取りあげてこ

なかった。

まとめにかえて

以上検討してきたように、モンゴル社会では、婚姻関係に「冗談関係」と「忌避関係」がワン・セットになって織り込まれていて、親族関係を円滑にしている。そして、冗談関係の特徴は次の三つである。第一に、婚入女性と夫の一族の上位世代の男性との間では、忌避関係が設定されている。これに対して、夫の年下のキョウダイとの間には、冗談関係が成立している。また、夫の姉妹の配偶者と間は、年齢に関係なく、冗談関係が成立している。第二に、男性は妻の親族（＝姻族）との関係において、妻の年下のキョウダイとの間、および妻の出自集団に婚入した女性との間に、冗談関係が成立する。だが、妻の一族の上位世代の男性との間に極端な忌避関係は見られない。第三に、婚姻関係にある姻族・姻戚同士の間では、同一世代間だけに冗談関係が成立している。

モンゴル社会に見られるこうした冗談関係は、2章でまとめた A. R. Radcliffe-Brown が指摘した冗談関係の仕組みのさまざまな形態のうち、個人レベルで見ると、A 型（同世代の冗談関係）であり、集団レベルで見ると、B 型（姻族間の冗談関係）に当たる。

なぜ婚入女性は、婚入先の親族集団（＝姻族・姻戚）との間に、冗談関係と忌避関係がワン・セットになって設定されているのであろうか。それは、婚入してきた女性は、夫の家族・親族集団において、家族・親族集団の一員になるという側面と、外から入ってきた者であるという側面の二面性を持っているからである。婚入女性は、夫の家族・親族グループの外から入ってきたよそ者であるがため、夫の家族・親族の要になる者＝上位世代の男性に対して、極端な敬意や忌避を持って分離し、夫の家族・親族グループの従来からの秩序を安定させる必要があるからであろう。しかし、そればかりでは、婚入女性にとってはあまり厳し過ぎるので、それと対照的に、夫の家族・親族のグループの中の年下のキョウダイとは冗談関係を持たせて、バランスを取っていることになる。

婚姻儀礼において、兄嫁（＝ベルゲン）が果たす役割も、こうした二面性と関わっている。婚姻儀礼においてベルゲンが果たす重要な役割の一つとして、花嫁を婚出させて、花婿の家に移す際のサポート役がある。花嫁の両親や兄姉は花婿との間に冗談関係を持たないが、ベルゲンは冗談関係を持つ。従って、婚姻儀礼において、花嫁を花婿の家へ円滑に移すことができ、花嫁と花婿の

両家の関係を仲介する上で、ソフトに対応できるからである。

モンゴルの男性には、ハダムの中で、一般の親族関係における目上の者に対しての尊敬はもちろんのことだが、極端な忌避関係は見られない。それは、モンゴル社会においては、フルゲンはあくまでも外部者であり、内部者ではないので、妻の家族・親族に対して、極端な敬意や忌避を持って分離する必要がないからであろう。

そして、モンゴル社会においては、遊牧という部族社会に課せられた小規模な集団、希薄な人口、移動性といった制約がある。また、部族社会一般に見られる特殊性でもある、父系社会の外婚制を保ちながら、社会的、経済的、政治的な生活を保障するという観点から見て、姻族間との連合性はとても重要な意味を持つ。そこに、「冗談」を言える特殊なシステムが設定されることで、社会や親族生活、特に婚姻儀礼の過程では、種々の危機を緩和し、万事を円滑に進行する役割が果たされているのである。

これはまさに Radcliffe-Brown が、「社会的接合」と「社会的分離」という概念で冗談と忌避を説明したものと一致する。つまり、冗談の機能は両者を接合させて、忌避の機能は両者を分離させる関係を持っている。Radcliffe-Brown は、冗談関係と忌避関係がワン・セットになって表れていることを、親族や姻族間の二律背反的な葛藤を避ける方法とみなしたのである。クランあるいは部族間における連盟を構成している冗談関係も、また結婚による姻族間におけるそれも、ともに、「接合的および分裂的構成要素が保持され、結び合わされている社会行動を、一定の安定した体系に組織する方式である」ということのとおり、モンゴル社会の親族体系においては、その人たちに対して払われる敬意の種類と程度に応じて、さまざまな親族を区別することが可能である。

モンゴルの姻族・姻戚関係においては、自分と同世代の姻族・姻戚同士の間には、「冗談」を言える特殊なシステムが設定されていることが、社会や親族生活、特に婚姻儀礼の過程で、種々の危機を緩和し、万事を円滑に進行する役割を果たしている。そして、「冗談関係」と「忌避関係」が親族のシステムの中に埋め込まれていることが家族・親族が生活をする中で、各人が均衡を保つための非常に重要な機制となっている。

注

- 1) A. R. Radcliffe-Brown (青柳まちこ訳 浦生正男解説)、1981、『未開社会における構造と機能』p.122
- 2) 同上
- 3) 同上書 P.124
- 4) 宇野伸浩、1999、「チンギス・カン家の通婚関係にみられる対称的婚姻縁組」『国立民族学博物館研究報告別冊』20 (宇野は、これまでの史料と文献研究によって、主にチンギス・カン家の通婚関係と姻族に見られる通婚パターンを分析し、その婚姻システムは「対称的婚姻縁組」であると言う) ; 2008、「フレグ家の通婚関係にみられる交換婚」、『北東アジア研究 別冊』1
- 5) Herbert Harkld Valirando 愛宕松男訳、1979、「西北蒙古ナロバンチン寺領における遊牧モンゴルの経済・社会生活」(上・下)『内陸アジア史論集』第二(《Mongol community and kinship》1957 New Haven)
- 6) 兄嫁に対する敬称であり、婚入女性のことを ber=ベルと呼ぶことから由来している
- 7) Herbert Harkld Valirando、1979、愛宕松男(訳)「西北蒙古ナロバンチン寺領における遊牧モンゴルの経済・社会生活」(上・下)『内陸アジア史論集』第二(《Mongol community and kinship》1957 New H aven) p.312
- 8) 小長谷由紀、1996、『モンゴル草原の生活』朝日新聞社
- 9) 田中華子・D. Taya、2001、「トルゴート・モンゴルの婚姻儀礼における女性親族ベルゲン [Bergen] の役割」『比較家族史研究』第16号
- 10) 田中華子、2004、「モンゴル語親族語彙研究：ホボクサイリのトルゴート方言とハルハ方言、モンゴル文語の比較対照による研究」お茶の水女子大学博士論文、p.536
- 11) 山下晋司・船曳建夫編、2001、『文化人類学キーワード』有斐閣双書、p.154
- 12) 本間康平等編集、1993、『新社会学辞典』有斐閣、p.734
- 13) A. R. Radcliffe-Brown (青柳まちこ訳 浦生正男解説)、1981、『未開社会における構造と機能』(『Structure and Function in Primitive Society』) p.123
- 14) 同上
- 15) 同上書 p.125
- 16) 同上書 p.128
- 17) 同上
- 18) 同上書 p.123
- 19) 同上
- 20) 同上
- 21) R. M. Kkeesing (小川・笠原等訳)、1982、『親族集団と社会構造』未来社 p.22
- 22) 同上書 p.23
- 23) 同上
- 24) 同上 p.80
- 25) 原ひろ子編、1986、『家族の文化誌—さまざまなカタチと変化』弘文堂
- 26) A. R. Radcliffe-Brown (青柳まちこ訳 浦生正男解説)、1981、『未開社会における構造と機能』(『Structure and Function in Primitive Society』) p.122
- 27) 田中華子・D. Taya、2001、「トルゴート・モンゴルの婚姻儀礼における女性親族ベルゲン[Bergen]の役割」『比較家族史研究』第16号
- 28) Herbert Harkld Valirando、1979、愛宕松男(訳)「西北蒙古ナロバンチン寺領における遊牧モンゴルの経済・社会生活」(上・下)『内陸アジア史論集』第二(《Mongol community and kinship》1957 New H aven)
- 29) 小長谷由紀、1996、『モンゴル草原の生活』朝日新聞社、p.197
- 30) モンゴル社会における冗談関係については、あるゼミで一度報告したことがあるが、その時に、かつて韓国に留学し、韓国を研究対象としている文化人類学の研究者から、韓国社会にも冗談関係が存在するとの指摘をうけた。また、バングラデッシュ人社会にも、世代を越えた祖母と孫の間にも冗談関係が存在していることを筆者は確認している。
- 31) 本論文では、「同士」は、共同して同一の対象を冗談で言い負かすことできる、冗談関係にある2者を指す。以下、カッコをとる。
- 32) 岩村忍、1963、『元朝秘史』中央公論社
- 33) 田中華子・D. Taya、2001、「トルゴート・モンゴルの婚姻儀礼における女性親族ベルゲン [Bergen] の役割」『比較家族史研究』第16号：16-17
- 34) 小長谷由紀、1996、『モンゴル草原の生活』朝日新聞社、p.197
- 35) 高明潔、1996、「内蒙古遊牧地域における妻方居住婚：双系相続制社会の一面」『民族学研究』第60号
- 36) 岩村忍、1963、『元朝秘史』中央公論社
- 37) 同上書

参考文献

- A. R. Radcliffe-Brown (青柳まちこ訳 浦生正男解説)、1981、『未開社会における構造と機能』新泉社
- Herbert Harkld Valirando、1957、*Mongol Community and Kinship*, New Haven (=1979、愛宕松男訳「西北蒙古ナロバンチン寺領における遊牧モンゴルの経済・社会生活」(上・下)『内陸アジア史論集』第二)
- R. M. Kkeesing (小川正恭ら訳)、1982、『親族集団と社会構造』未来社
- 小長谷由紀、1996、『モンゴル草原の生活』朝日新聞社
- 宇野伸浩、1999、「チンギス・カン家の通婚関係にみられる対称的婚姻縁組」『国立民族学博物館研究報告別冊』20
- 宇野伸浩、2008、「フレグ家の通婚関係にみられる交換婚」『北東アジア研究 別冊』1
- 田中華子・D. Taya、2001、「トルゴート・モンゴルの婚姻儀礼における女性親族ベルゲン [Bergen] の役割」『比較家族史研究』第16号
- 田中華子、2004、「モンゴル語親族語彙研究：ホボクサイリのトルゴート方言とハルハ方言、モンゴル文語の比較対照

による研究」お茶の水女子大学博士論文
原ひろ子（編）、1986、『家族の文化誌—さまざまなカタチと
変化』弘文堂
高明潔、1996、「内蒙古遊牧地域における妻方居住婚：双系

相続制社会の一面」『民族学研究』第60号
岩村忍、1963、『元朝秘史』中央公論社
山下晋司等編、2001、『文化人類学キーワード』有斐閣双書
本間康平等編集、1993、『新社会学辞典』有斐閣